寄稿

ヒアリの台湾事情と県内対応

産業医大非常勤講師　荻野　和正氏（弘前出身）

南米原産の毒アリ「ヒアリ」が今年、国内各地に侵入・生息していることが明らかになった。ヒアリ被害が広がっている台湾の状況を8月上旬に調査した、有害生物防除などを手がけるサニックス（本社・福岡市）の研究員で、産業医科大学（北九州市）非常勤講師の荻野和正氏（55）＝弘前市出身、衛生動物学＝が、台湾の被害状況や、県内侵入の可能性などについて本紙に寄稿した。

◇

ヒアリの日本国内での生息が、本年5月、神戸の港湾地域コンテナステーションで発見されて以来、各地で確認されている。いずれも中国・広州経由のコンテナ貨物に関連した地域であり、それらの貨物の停留地では、ヒアリ調査の強化と、潜伏対策のための港湾整備が行われている。

ヒアリは南米のほか北米、中国、豪州等に定着している。非常に繁殖力が強く、巣内の生息数は通常、数万から数十万に及び、巨大化した巣は地面に突出したアリ塚を形成する。人的被害に加え産業上の被害も大きく、米国の被害額（産業上および人的被害）は毎年数千億円に上るという。

隣国・台湾では2004年に米国からの侵入が北部の都市・桃園で発見されたが、初めの周知・対策が遅れたため、北部に

繁殖防止策の普及重要

おいては繁殖した巣が見られている。先日、民間企業のヒアリ対策構築のため現地を視察したところ、空港と建築現場を重点的に対策を実施していた。これは、建物の電気配線被害や断線による火災、地下土砂の運び出しによる建物の倒壊等、特に金額が大きくなる産業被害の防止に注力しているためと考えられる。対策としては、ヒアリ探索犬や疑似餌による網羅的な調査や、「バギー車」「ドローン」を用いた毒餌剤の広域散布および、巣内への薬剤注入という、2段階駆除法を用いて、生息域の拡大は抑制しているようだ。特に重要な生息調査方法と毒餌剤の開発には国家研究機関も関わり、繁殖巣壊滅の効率化と精度向上を目指して、ヒアリの生態や食物嗜好性の研究を継続している。

半面、住宅地や農地において小型の巣が放置されがちであるのは問題だろう。実際、桃園市内の河川沿い遊歩道には古い巣跡があり、深部には少数の生息が見られる。また、農地の道路沿いやあぜ道には活発な巣が点在している。防除業者によると、市内道路の中央分離帯にも多くの巣が放置されているようだ。これらの巣は時に、刺咬被害やアナフィラキシー症等、人間に傷害を与えている。今後、さらなる啓蒙活動と、市民も活用できる効率・効果の高い駆除方法の開発普及が緊急の課題となる。

さて、ヒアリは青森県に来るのだろうか。青森県より緯度の高い米国オレゴン州で既に繁殖が確認されているほか、日本国内でもさまざまな害虫が北侵しており、国際交流が拡大する中で青森県へのヒアリ侵入を止めるのは難しいだろう。しかし、繁殖は抑えうる。人的被害とともに、果樹園や牧場など、産業上の被害を被りかねないヒアリの被害を抑えるためには、県民の関心を高め、繁殖防止対策を普及させることが重要となる。

〈おぎの・かずまさ　1962年弘前市生まれ、北九州市在住。80年弘前高校卒、86年金沢大学大学院理学研究科生物学専攻修了。製薬会社研究員などを経て2004年からサニックス研究員。01年から産業医科大学医学部寄生虫学熱帯医学（現・免疫学寄生虫学）講座研究員、05年からは同大学非常勤講師を兼務。青年海外協力隊員としてホンジュラスのマラリア対策（1992～94年）、鹿児島大学客員研究員としてミクロネシアの衛生害虫調査（99年）に携わった〉

台湾・桃園市郊外の農道脇でヒアリの巣を見つけ、しゃがんで発見を知らせるヒアリ探索犬（筆者撮影）

桃園市郊外で見つかったヒアリの巣（筆者撮影）

この画像は、当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです。